

kalpanālāghava と kalpanāgurava

金 沢 篤

granthagauravabhayād iha diṅmātram ucyate.

0.

バーッタ派(Bhāṭṭa)の知識論の綱要書として名高いナーラーヤナ(Nārāyaṇa)の『マーナメーヨーダヤ』(Mānameyodaya: MMU)には次のような一節がある。

i) nāpi pāriśeṣyād vāyusiddhiḥ / asiddhadravyakalpanātaḥ siddhasyai-
va dravyasya guṇāntarakalpanāyā laghiyastaratvāt / kalpanālāgha-
vasyaiva hi guṇavattaratvam āhur ācāryāḥ —

kalpanālāghavam yatra taṃ pakṣam rocayāmahe /

kalpanāguravam yatra taṃ pakṣam na sahāmahe //

iti / atas tvagindriyagrāhyo vāyuḥ / (MMU, p. 161, 11. 1-6)

1) 残余法(pāriśeṣya)に基づいて風(vāyu)の確立(siddhi)がある、ということもない。確定していない実体(dravya)の想定(kalpanā)より、確定しているものに他ならぬ実体に対する他の性質(guṇa)の想定が、遙かにより簡潔(laghiyastara)であるが故に。何故なら師長(ācāryāḥ)が「想定の簡潔さ」(kalpanālāghava)こそが、遙かに素晴らしい(guṇavattara)ことであると、言われているのであるから。〔即ち〕

「想定の簡潔さの存する所説(pakṣa)を余は好めり(rocayāmahe)。想定の複雑さ(kalpanāgurava)の存する所説(pakṣa)を余は耐えじ(na sahāmahe)。」

と。この故に、風は触感(tvagindriya)によって把捉される。

ここで便宜的に「想定の簡潔さ」「想定の複雑さ」と訳された kalpanālāghava, kalpanāgurava という術語¹⁾によって表わされる二概念は、後代主にニヤーヤ学派(Naiyāyika or Tārīkika)の論理学にあって、知識手段(pramāṇa)の補助を

なすもの (sahakārin) としてのタルカ (tarka) の内に明確に数えられるにいたるものである²⁾。実際その両語は対比的に用いられることが多く、一般に他説の過 (doṣa) を指摘し、自説の卓越性の宣揚として展開・具現されるインド哲学の数ある論書の中に屢々見出されるものである。小論は、若干の用例を通じて主としてその「二概念」及びそれらと表裏をなす「一つの原則³⁾」を詮議し、あわせて従来看過されてきた「一つの歴史的展望⁴⁾」を得ることを目的としている。

I.

少しく簡潔に過ぎる嫌いがあるとは言え、手始めにこの i) を今少し仔細に検討してみよう。

前主張：〔残余法 (pāriśeṣya) に基づいて〕風 (vāyu) の確立 (siddhi) がある。(A)

定説①：Aの否定。

②：風は触感 (tvagindriya) によって把捉される。(B)

認定①：Aには kalpanāgaurava があり、Bには kalpanālāghava がある。

②：Aより、Bが優れている。

原則：一つの論題を廻る二つの理論がある時には、kalpanālāghava のある理論が優れている。(C)

根拠：Cを表明する師長の言があり、自らもCを受け入れる立場にある。

原則：性質を持つもの (dharmin) の想定より、性質 (dharma) の想定が簡潔である。(D)⁵⁾

風 (vāyu) という実体 (dravya) は、前主張者にとっては、確定していない (asiddha) が、定説者にとっては、確定している (siddha)。前主張者にとっては、風は直接知覚できず (apratyakṣa)、残余法⁶⁾ に基づいて確定される。これは、定説者にとっては、確定していない実体を想定すること (kalpanā) である。定説者は、確定している実体たる風は、その実体に別の性質 (guṇa) を想定すること (kalpanā) によって、直接知覚される (= 触感によって把捉される) と主張する。原則 D によって、この二つの説 (理論) では、後者の想定がより簡潔である。従って、原則 C によって B 説が優れている。この原則 C は、いわば「理論構築上の簡潔性の原則⁷⁾」と呼ぶことが出来る。だが、この原則を歯牙にかけない者にとっては、この一節に展開される議論は無意味なものとなるはずである。ま

た、仮りに原則Cを受け入れたとしても、原則Dに関しては、異論があり得よう⁹⁾。この用例は残念ながら、その間のやりとりまでは教えてくれない。ただ、原則Cが明確にされないままにそれを用いて議論が展開されることが普通である⁹⁾ことを考えるならば、このi)で、原則Cが、師長の言明として明確に表明されていることは重要であろう。

著者 Nārāyaṇa は、別の箇所でもた次のように記している。

ii) gauravaṃ lāghavaṃ ceti tarkau sārvaṭrikāv ubhau /
gauravaṃ kalpanādhikyaṃ lāghavaṃ tv alpakaḥ kalpanā //
 doṣaprasaṅgarūpatvaṃ gauravasyaiva vidyate /
 sādhye guṇakathādvārā lāghavasya prasaṅgatā // (MMU, p. 40,
 11.1-4)

2) 複雑さ (gaurava) と簡潔さ (lāghava) という二つのタルカは一般的なもの (sārvaṭrika) である。複雑さとは想定の過剰性 (kalpanādhikya) であり、一方簡潔さとは、少量の想定 (alpakaḥ kalpanā) である。複雑さのみ、過への帰着 (doṣaprasaṅga) という形をもつことが存する。簡潔さには利を語ること (guṇakathā) を媒介として、所証 (sādhyā) へ帰着することがある。

iii) prābhākarāḥ punar asyāḥ padārthāntaratvam anumānagamyatvaṃ ca saṃgirante / tad ayuktam asyāḥ siddhasyaiva padārthasya guṇatvena kalpane lāghavāt / anyathā gauravaprasaṅgat / śakteḥ padārthāntaratvam api kaumārilānām iṣṭam eva / ity alaṃ tannirāsaprayāsenā / anumānagamyatvaṃ tu pratyakṣato dṛṣṭasambandhasyaiva liṅgasyānumāpakatvam iti samarthayadbhir asmābhir evānumānaparīkṣāyāṃ nirastam /¹⁰⁾ (MMU, p. 266, ll. 5-10)

3) またプラバーカラの徒 (Prābhākara) らは、この〔可能性〕が、他の〔独立の〕句義 (padārtha) であること、及び推理 (anumāna) によって了知されるものであることを、主張する。〔だが〕それは適當ではない。この〔可能性〕に対して、確定したものに他ならない句義の、性質 (guṇa) であると想定するならば、簡潔であるが故に。さもなければ、複雑さ〔という過が〕出来するが故に。可能性が、他の〔独立の〕句義であるということもまた、クマーリラの徒 (Kaumārila) らにとっては、望まれたもの

(iṣṭa) に他ならないのである。以上で、その「可能力は他の独立の句義であるとの、プラバーカラの徒らの主張」の論駁の為の努力は充分である。一方、「可能力が」推理によって了知されるものであることは、直接知覚に基づいて知覚された関係を持つものに他ならぬ徴標 (liṅga) が推理せしむるものであると考える他ならぬ我々によって、「推理の考察〔章〕」において、論駁されたのである。

この ii) iii) によって、先に i) について検討したことが、概ね裏づけられるであろう。kalpanālāghava,-gurava という二概念を明らかにする ii) においては、lāghava, gurava の二者が、それぞれ alpa¹¹⁾, ādhikya に対応するものとして明記されていること、i) と同様その二概念を用いての議論の実例を与える iii) においては、やはり原則 D が活用されていることの二点を確認して次に進もう。

II.

i) において Nārāyaṇa が kalpanālāghava,-gurava を用いての議論の為の「権威」として引用する師長 (ācāryāḥ) の言は、i) iii) の用例で明らかな通り、二つの主張に対して、それぞれ kalpanālāghava,-gurava を配することによって、後者を退け、前者を選びとる際の拠り所となるものである。想定を持つ「軽いこと」(lāghava or laghutva) 「重いこと」(gurava or gurutva) という性質は、それ自体がそれを持つ想定ないしそれよりなる主張(理論)の優・劣の基準なのではない。論者によっては、「重いこともあるべし、[だからといって] どんな過があるだろう」(bhavatu guravam api ko doṣa¹²⁾) という開き直りが常に予想されるからである。その際に拠り所となるのが、その原則 C であろう。従ってその二概念と、個々の想定にそれを認定することを通じてそれらに優・劣を割り当てる原則とを明確に区別する必要がある。その二概念が、どのような環境の中で育まれたか、そして何時、kalpanālāghava,-gurava という二つの術語として結実したか、さらにその原則 C が、何時、誰によって明確に表明されたか、と問うことが、歴史的展望を得るには不可欠であろう。その意味で Nārāyaṇa によって権威者とされる師長が誰かを先ず問題にしようというのである。

MMU の英訳をも与える編者 C. Kunhan Raja & S. S. Suryanarayana Sastri は、ただ師長 (ācāryāḥ¹³⁾) を The Preceptors とするばかりで、それが誰を指すかに言及せず、また引用句の出典も詳らかにしていない。だが、MMU

冒頭の帰敬偈には以下のようにあることから、その師長をパーッタ派の創始者たるクマーリラ (Kumārila) と考えているのかも知れない。

iv) ācāryamatapāthodhau bālān api ninīṣatām /
 bhīmatām ko 'pi gopālapotaḥ pota ivāstu naḥ //
 mānameyavibhāgena vastūnām dvividhā sthitiḥ /
 atas tad ubhayaṃ brūmaḥ śrīmatkaumārīlādhvānā // (MMU, p. 1,
 11. 4-7)

- 4) 幼童らをも、師長 (ācārya) の思想の大洋へ誘わんとして怖じ気づいている我らにとっては、如何なる牛飼いの子も小船の如きであろう。知識手段と知識対象の別により、実在物は二種である。この故に我らは、その両者を吉祥なるクマーリラ〔の徒〕の道に従って述べる。

実際MMUのここかしこには、やはり英訳者によっては出典が明記されない¹⁴⁾ものの、師長 (ācāryāḥ) の言として、我々にも馴染みの『シュローカヴァールッテイカ』(Śloka-vārttika: SV) 等の詩節が引かれている¹⁵⁾のである。だが残念ながら問題の詩節はSVに見出されず、Kumārilaの他の現行著作中にも見出されない。従ってそれは今日少なからぬ断片が回収されている、Kumārilaの失われた著作『ブリハッティーカー』(Brhātṭikā)のものとも考えられる¹⁶⁾が、そう断定するには決めてを欠くようである。いつの場合にも引用句の出典捜しは面倒なものであるが、幸いこの場合には、思いがけない所から資料が得られるのである。今日ニヤーヤ(-ヴァイシェーシカ)学派の綱要書として知られるケーシャヴァミシュラ (Keśavamīśra) の『タルカバーシャー』(Tarkabhāṣā) に対するチンナムバッタ (Cinṇambhaṭṭa) の『プラカーシカー』(Tarkabhāṣāprakāśikā: TBhP) 中に以下の一節がある。

v) samarthālpakalpanā kalpanālāghavam, samarthānalpakalpanā kalpanāgauravam / tatra kevalaṃ tantubhir eva paṭotpattyupapattau tadgatarūpasyāpi kāraṇatvakalpanāyām kalpanāgauravadoṣaḥ syāt / tad uktaṃ Vācaspatimiśraiḥ —
kalpanālāghavaṃ yatra taṃ pakṣaṃ (rocayā)mahe /
kalpanāgauravaṃ yatra taṃ pakṣaṃ na sahāmahe //
 iti // (TBhP, p. 106, 11. 3-8)

- 5) 想定 of 簡潔さとは、適当なる少量の (alpa) 想定であり、想定 of 複雑さと

は、適当なる非少量 (analpa) の想定である。その場合、単に諸の糸 (tanu) によってのみ、布 (paṭa) の生起が妥当である時に、その〔糸に〕存する色 (rūpa) もまた〔布の生起の〕原因であると想定するならば、想定 of 複雑さという過 (doṣa) が出来するのであろう。尊きヴァーチャスパティミシュラ (Vācaspatimiśra) によって以下のことが言われているのである。

「想定 of 簡潔さの存する所説 (pakṣa) を余は好めり (rocayāmahe)。
想定 of 複雑さ (kalpanāgaurava) の存する所説 (pakṣa) を余は耐えじ (na sahāmahe)。」

と。

編者が依拠した写本の不備より (rocayā)mahe と留保を付さなければならなかったとはいえ、MMU で師長 (ācāryaḥ) のものとされる引用句と TBhP でヴァーチャスパティミシュラ (Vācaspatimiśra) の言とされる引用句とが同一のものであると考えることは許されるであろう。kalpanālāghava, -gaurava の使用に際して、ミーマーンサー (Mīmāṃsā) 学派とニヤーヤ学派の両著作において権威として引かれる詩節が、同一のものであり、それが Vācaspati のものであることは重要である。ニヤーヤ学派の重要な学匠であり、パーッタ派の著作も物し、後代 sarvatantrasvatantra と呼称される Vācaspati¹⁷⁾ が、Nārāyaṇa によって Kumārila と同一の尊称で呼ばれたとしても不思議ではあるまい¹⁸⁾。

さて、Cinnambhaṭṭa によって問題の詩節が他ならぬ Vācaspati のものであることが明らかになったのであるから、次にはその出典を詳らかにしておく必要がある。だが、今日までかなりの数の著作を完全な形で伝える Vācaspati の現行著作中には、問題の詩節は見出されないのである。従って、その詩節は、やはり失われてしまった Vācaspati の著作『タットヴァサミークシャー』(Brahmatattvasamīkṣā) 中のものとも考えることも可能かも知れない。だが、今は失われてしまっているものについて空想を逞しくするよりは、現に見られる Vācaspati の唯一の独立の著作『タットヴァビンドゥ』(Tattvabindu: TB) 中の次の一節に帰すことの方が無難であろう。

vi) tathā ca tisraḥ śaktayaḥ kalpyeran, dve vā / padānām hi tāvad artharūpābhīdhānarūpā śaktiḥ, tadartharūpāṇām anyonyānvayaśaktiḥ, tadādhānaśaktiś cāparā padānām eveti / smāra katvapakṣe tūktam śaktidvayam / anvitābhīdhāne tu padānām ekaiva śaktiḥ,

tat kalpanālāghavāt etad eva nyāyyam iti //
atrocyate—satyam;

kalpanālāghavaṃ yatra taṃ pakṣaṃ rocayāmahe /

tad eva kataratreti nipuṇaṃ sampradhāryatām // (TB, p.122, 1.
3-p.123, 1.8)

- 6) またそうであるならば、三つの可能性 (śakti) が想定されることになるであろう。もしくは二つの〔可能性が想定されることになるであろう〕。なぜなら諸の単語 (pada) には、先ず意味自体に〔関する〕表示力 (abhidhāna) という形の可能性 (śakti) が、〔さらに〕諸のその意味自体には、相互連関 (anyonyānvaya) する可能性が、さらに、他ならぬ諸の単語には、その〔諸の意味自体に、相互連関する可能性〕を生ずるもう一つの可能性が〔想定されることになるであろう〕から。一方、〔単語を、〕想起せしむるものである〔と考える〕説 (smāraakatvapakṣa) においては、二つの可能性が〔想定されるであろう〕と言われた。しかるに、連関表示 (anvitābhidhāna) 〔説〕においては、諸の単語に、唯一つの可能性が〔想定されるのである〕。従って、想定 of 簡潔さ (kalpanālāghava) の故に、その〔連関表示説〕だけが正しいのである、と。

これに関して言われる。その通りである。

想定 of 簡潔さの存する所説 (pakṣa) を余は好めり (rocayāmahe)。

他ならぬその〔想定 of 簡潔さ〕が何れにあるかということ、正確に (nipuṇaṃ) 決定されるべきである。

単語の持つ表示力等に関する諸説の検討としてある、この TB の一節に明らかな通り、MMU や TBhP において権威として引かれた一詩節の半分までが、確かに Vācaspati 自身によって記されているのである。この TB 中の詩節が、これまでの TB の研究者によっては、他の論師の著作からの引用ではなしに、Vācaspati 自身によるものと無条件に考えられている¹⁹⁾ことを確認した上で、果たして同一人物が、同一の半詩節を持つ異なった詩節を書き残すことがあり得るかという点に思いを馳せよう。もしかしたら本来 TB には、i)v) 中の詩節の後半もあったのかも知れない。また問題の詩節の後半はいわば前半の反復に過ぎないとも言え、ある意味では冗長とも見なし得るものである。Vācaspati 以後、TB のその詩節の有用性に注目した人物によって後半が捏造・付加されてそれ以来そ

れが Vācaspati の言として流通するに至ったとむしろ考えるべきであろう。何れにしても、lāghava と gurava とを対概念と承知する限り、この半詩節だけでも十分に言い尽されていると見なし得る原則Cは、Vācaspati のものと考えておこう。さらに vi)からは、i)ii)iii)v)では analpa, alpa; (ādhikya), alpa との結び付きによって理解する他なく、必ずしも明確ではなかった gurava, lāghava が、単純に数えることのできる（従って gurava, lāghava の認定が容易にできる）、想定の対象たる「可能力」(śakti) の数の多・少として現れている²⁰⁾ことに注目しよう。この場合にはもはや、原則Dは必要とされていないようである。

III.

実のところ、vi)の詩節は、TBの議論全体²¹⁾の展開の上で極めて重要な役割を担う三つの詩節の内の一つである。その後半に、kalpanālāghava,-guravaを用いての議論に際しての注意事項が端的に述べられている²²⁾という点を確認した上で、kalpanālāghava,-gurava と表裏をなす一つの原則を十全に知る為にも残りの特にこの詩節に関わりの深い詩節を以下に引こう。

vii) miyamānāparityāgo bādhake nāsati sphute /²³⁾

drṣṭāt kāryopapattau ca nādrṣṭaparikalpanā // (TB, p. 8, ll. 4-5)

7) 明白な否定要因 (bādhaka) が存しないならば、知覚されるものの放棄は〔適当では〕ない²³⁾。経験されているもの (drṣṭa: 可見) に基づいて結果 (kārya) [の生起] が成立するならば、経験されていないもの (adrṣṭa: 不可見) の想定は〔適当では〕ない。

ここにもまた一つの原則の表明がある。

原則：経験されているもの (drṣṭa: 可見) に基づいて結果 (kārya)[の生起] が成立するならば、経験されていないもの (adrṣṭa: 不可見) の想定は〔適当では〕ない。(E)

TB 自体の議論の詳細に立ち入らずとも、ここに引いた vi) vii) の二詩節の重要性は、ただTBが「文章の意味の知識の原因」を主題とする論書であるという点を知りさえすれば理解し得るであろう。想定 (kalpanā) が、常に「経験されていないもの」(adrṣṭa: 不可見)²⁴⁾を廻ってのものであるということで原則Cと拮抗し得るこの原則Eは、Vācaspati によって信条表明の如きもの²⁵⁾として表明さ

れた原則Cに比してやや具体性を帯びたものと言い得るのである。そこには、可見のものを不都合がない限り受け入れた上で理論が構築されるべきであり、無闇に不可見のものを想定することを避けるという経験主義者 Vācaspati の奉ずる原則 (nyāya) がはっきり窺えるであろう。まさしく「オッカムの剃刀²⁶⁾」である。Cのような形での原則の表明が Vācaspati の他には見出し難いのに比して、Eの形での原則の表明は、kalpanālāghava,-gurava を用いての議論に際して、全く屢々見出されることは、今の場合興味深いことである。というのも、それが、我々の目下の関心事である kalpanālāghava,-gurava に関する歴史的展望を獲得する為の機縁となるように思われるからである。そこで、可見 (dr̥ṣṭa) と不可見 (adr̥ṣṭa) とが対比されていること²⁷⁾が重要である。上に見た用例からも容易に見てとれるように、不可見の代表例が、可能力 (śakti) であることには異論がないであろう。śakti が、誰にとっても不可見と考えられたかどうか²⁸⁾は今は問わないとしても、少なくとも kalpanālāghava,-gurava という術語を多用し、明確に原則C,Eを表明して、それに拠った Vācaspati にとっては、そうであったことは確実である²⁹⁾。以下には、この śakti の問題と関わりの深い、原則Eについて検討を進めよう。

Vācaspati に先行することが確実なシャンカラ (Śaṅkara) は、『ブラフマストラ』(Brahmasūtra) に対する『注解書』(Śaṅkarabhāṣya : BSSBh) の中で次のように記している。

viii) varṇebhyaś cārthapratīteḥ saṃbhavāt sphoṭakalpanā 'narthikā
/ (BSSBh, p. 329, ll. 9-10)

8) また諸の字音 (varṇa)に基づいて、意味 (artha) の知 (pratīti) が、可能であるが故に、スポータ (sphota) の想定は、無意味 (anarthika) である。

これに対して Vācaspati の『タートパリヤティーカー』(Nyāyavārttikatātparyāṭikā: NVT) の以下の文を対比させてみたならば如何であろうか。

ix) tasmād dr̥ṣṭebhya eva varṇebhyo dr̥ṣṭaparakārānupātibhyo 'rthapratyayotpattir upapadyamānā nādr̥ṣṭam sphoṭātmānam dr̥śyamānavarṇabhedāpahnava kalpayitum arhatīti siddham...(NVT, p. 655, l. 28-p. 656, l. 11)

9) それ故に、可見のものに他ならぬ、既知の手段に従う諸の字音に基づい

て、意味の知の生起が成立するのであるから、不可見のスポータ自体を、可見の諸字音の別異性を否定することによって、想定し得ない、ということが確定した。

この ix) は、viii) で見られる「意味の知」という結果の生起の原因を廻る二説、字音 (varṇa) 説とスポータ (sphoṭa) 説の議論に、それぞれ可見、不可見が配されていることによって、まさしくそれが原則 E の適用例であることを示している。同時にそれは、dṛṣṭa, adṛṣṭa との認定が可能でありさえすれば、この原則 E とそれに基づいて成立する kalpanālāghava,-gaurava を用いての議論が他にも可能となることを端的に示していると言えるであろう。

x) na hi kalpyamānā śaktiḥ śaktyantarayuktā kalpyate, tanmātrād eva saṃbhava śaktyantarakalpanāyām anavasthāpātāt,...(TB, p. 28, ll. 3-5)

10) 実に、想定されるものである可能性が、他の可能性を具えていると想定されることはないのである。その〔前者〕のみに基づくだけで、〔説明〕が可能である時に、他の可能性を想定するならば、無限遡及 (anavasthā) に陥るが故に。

この x) は、既に vi) においても見られた議論と類似のものではあるが、ix) との対比で見た場合、新たな展望が開けてくるようである。即ちここに見られる「不可見の A のみによって X の説明がつくときに、A とは別の不可見の B を想定することは適当ではない」という形での原則は、先の場合が可見と不可見との対比によるもの (α) であったことを確認するならば、少数の不可見と多数の不可見との対比によるもの (β) と解することが出来るであろう。Vācaspati の原則 C に現れる kalpanālāghava,-gaurava は直接的には後者を念頭においたものとはいえ、具体性を欠く分だけ、前者をも包摂するものとして機能することが可能であったと言えるのである。つまり、kalpanālāghava,-gaurava には、この二つの局面 (α) (β) が考慮されなければならないということである。そして、原則 E とは、(α) にのみ関わるものである。このことは、後代の用例に基づいて析出され、指摘されている、kalpanālāghava,-gaurava の二面性、「質的」(qualitative) と「数量的」(quantitative)³⁰⁾ に対応すると言えるかもしれない。vi) や x) におけるように、多数の不可見の想定からなる理論よりは、少数の不可見の想定からなる理論に kalpanālāghava があると認定することは容易であろうが、i) iii) や

viii) ix) の場合には、原則Dや原則Eに依拠せずしては、kalpanālāghava,-gurava が奈辺にあるかの認定は、そう簡単ではないように見えるからである。

実際、このEの形での原則の表明が、圧倒的に多いのである。この原則に従う限り、その理論は kalpanālāghava を保持し得るのであり、その原則を犯すと kalpanāgurava の過に踏み込むことになって、その原則の遵法者により、非難を浴びせられることになるのである。その原則Eの具体例を二・三見てみよう。例えば、ヴァイシェーシカ学派 (Vaiśeṣika) の学匠シュリーダラ (Śrīdhara) の『ニヤーヤカンダリー』 (Nyāyakandalī: NKan) には、次のようにある。

xi) tad apy apeśalam, dr̥ṣṭe saṃbhavaty adr̥ṣṭakalpanānavakāśāt /³¹⁾
(NKan, p. 346, ll. 10- 11)

11) それもまた魅惑的ではない。可見のものが、可能であるならば、不可見のものの想定の余地はないが故に。

また Vācaspati は『バーマティ』 (Bhāmati: BM) の中では、次のように表現している。

xii) na ca dr̥ṣṭe saṃbhavati(=y) adr̥ṣṭakalpanā nyāyyā / (BM, p. 768, l. 23)

12) また可見のものが、可能である時に、不可見のものの想定が正しい (nyāyya) ということはない。

こうした例はまだまだいくらかでも引くことが出来るが、vii) ix) x) xi) xii) においてのように、原則Eの表現が典型的であることを考慮するならば、それらが、全て共通の起源を持つものであると、推定できるように思われるのである。以下にはそれを検討するが、それに当たってはそのとっかかりを、以下の北川秀則博士の記述に求めたい。博士は、ミーマーンサー学派の有名な綱要書である『アルタサングラハ』 (Arthasaṃgraha) の和訳・解説³²⁾の中で、「Mīmāṃsā 学派が Veda 解釈の原則として挙げているものの中に次の二つの原則が存する³³⁾」として、そのうちの一つを「原則B」として、次のように記しておられる。

イ) 「原則 B: Veda の規定するところに従って行った行為から可見の結果 (=眼に見える結果) が生ずる場合には、その行為から不可見の結果 (=眼に見えない結果) が生ずると考えてはならないという原則。³⁴⁾」

生憎北川博士は、依拠した研究を明記されてはいるものの、具体的には典拠を示してはおられない。筆者が kalpanālāghava,-gurava との関わりで実例の中

から摘出して原則Eとして上に掲げたものこの「原則B」は、かなり似ているのである。北川博士が参照されたその研究を実見できないことは残念ではあるが、筆者はその「原則B」に当たるサンスクリット文を xiii) に見出し得る。

xiii) “labhyamāne phale dr̥ṣṭe nādr̥ṣṭaparikalpanā” iti nyāyena dr̥ṣṭaphalasambhava ’dr̥ṣṭa(phala)kalpanasyānyāyyatvāt / (Vyākhyā, MD, i, p. 12, ll. 14-15)

13) 「可見の果報が、得られるならば、不可見[の果報]を想定することは〔適当では〕ない」という原則により、可見の果報が可能である時に、不可見の（果報）の想定は正しくないが故に。

著者 Vaidyanātha Śāstri がこの原則 (nyāya) をどこから引いてきたかは、やはり不明であるが、見るところミーマーンサー学派の聖典解釈の原則として、「原則B」があることは、確実である。どうやら後代 kalpanālāghava,-gurava の拠り所として屢々持ち出される原則もやはり、ミーマーンサー学派の聖典解釈の原則に起源を見出されるように思われるのである。

『全哲学綱要』(Sarvadarśanasamgraha: SDS) の著者として有名な マーダヴァ (Mādhava) の『ジャイミニヤーニヤヤーマラーヴィスタラ』(Jaiminīyanyāyamālāvīstara: JNMV) には以下のようにある。

xiv) dr̥ṣṭaphale sambhavaty apūrvam na kalpanīyam / (JNMV, p. 58, 1. 15)

14) 可見の果報が可能であるならば、新得力 (apūrva) は想定されるべきではない。

さらにパーッタ派の創始者たる Kumārila の『タントラヴァールツィカ』(Tantravārttika: TnV) には次のようにある。

xv) dr̥ṣṭe hi saty adr̥ṣṭasya kalpanā niṣpramāṇikā // (TnV, ii, p. 103, 1. 12)

15) 実に可見のものが存する時に、不可見のものの想定は、正しくない。

また、シャバラ (Śabara) にはその『注解書』(Śābarabhāṣya: SBh) 中に以下のようにある。

xvi) na ca dr̥ṣṭe sati adr̥ṣṭakalpanā sambhavati / (SBh, vii, p. 77, ll. 20-21)

16) また、可見のものが存する時に、不可見のものの想定が、可能であると

いうことはない。

イ) とか xiv) が野放図に一般化し得ぬ形をとっているのに対して, xv) xvi) がそれ自体上に見た原則 E とほぼ同じ表現をとっている³⁵⁾ ことは、意味のあることであろう。だが、だからと言って, xv) xvi) が一般性と結びついていたかと言うと必ずしもそうではないのである。というのも、そこに見られる不可見 (adr̥ṣṭa) が、不可見一般を意味するのではなく、特定の祭式の結果としてある「新得力」(apūrva) を意味するものであるからである。その意味で、イ) も xiv) も xv) xvi) も特定の状況で適用し得る同一の原則と見なし得るのである。ここには、Vācaspati によって不可見としてのスポータを退けることを念頭において持ち出された原則 E とは全く異なった思惑が働いているのである。だが、後代 kalpanālāghava, -gurava の適用に際して、Vācaspati などによって原則 E として持ち出されるものが、ミーマーンサー学派の聖典解釈の原則として Śabara によって既に明確に表現されたものに基づくことは推定できるであろう。

IV.

では、kalpanālāghava, -gurava という術語の形で、後代ミーマーンサー学派の学匠によってのみならず、議論に際して広く用いられる二概念の方はどうであろうか。kalpanālāghava, -gurava という術語の使用例は、筆者の管見する限りでは、それほど古くは遡り得ないのである。また、それらの術語の成立に関わると考えられる「軽い想定」(laghu-kalpanā) 「重い想定」(guru-kalpanā) という形での laghu, guru の使用例にしても同じことである。以下にはその点に絞って検討を進めようと思うが、それは (α) に関わりを持つ原則 E に対して、主に (β) に関わる新たな原則を探ることであろう。

Śabara には、次のような形での一つの原則の表現が見出される。

xvii) evaṃ saty alpiyasy adr̥ṣṭakalpanā nyāyyā / (SBh, ii, p. 380, l.

8)

17) こうであるならば、少数の、不可見のものの想定が正しいのである。

原則：少数の、不可見のものの想定が正しい。(F)³⁶⁾

Śabara の著作中に、kalpanālāghava, -gurava という術語の使用例が一切見られないことを思えば、この xvii) は貴重である。さらに Kumārila (や Prabhākara) の現行著作中にも、それらの用例がほぼ見出されない³⁷⁾ という点を承

知した上で、Kumārila の以下の詩節に注目しよう。

xviii) adrṣṭaṃ prathamam tāvan nāstity evaṃ pratiyate /
tathaiva niścayaś cātra drṣṭam cen na virudhyate // (α)
drṣṭaśrutavirodhe tu saty adrṣṭam prakalpyate /
ekena cāvirodhitve siddhe nānekakalpanā // (β) (TnV, iii, p.
 3, ll. 4-7)

18) 先ず第一に、不可見のもの (adrṣṭa) は存在しない、というように理解される。そしてこの場合、もし可見のもの (drṣṭa) が矛盾しないならば、全くそのように、[不可見のものは存在しない、との]決定(niścaya)がある。(α)しかるに、可見のもの、[ないし]可聴のもの (śruta) に対して矛盾があるならば、不可見のもの [ないし不可聴のもの] が、想定される。そして、一つの [不可見のもの、ないし不可聴のもの] によって無矛盾なものであることが、確定したならば、複数の [不可見のもの、ないし不可聴のもの] の想定 (kalpanā) はない。(β)

この Kumārila による、Śabara の xvii) に表明された原則に対する注釈としてある xviii) は、後代、kalpanālāghava,-gurava という術語を用いて盛んに適用される、いわば「理論構築上の簡潔性の原則」に関する一つの歴史的展望を得る為にある小論にとっては、まことに意義深いものと言わねばなるまい。kalpanālāghava,-gurava という二概念が哲学上の議論にあって有効に活用される為の基盤としてある「一つの原則」と言うべき「理論構築上の簡潔性の原則」が持つ二面性を、これほどまでに簡潔に説明した例を、筆者は寡聞にも知らないのである。

(α) 可見に対して、矛盾があるならば、不可見の想定がなされる。

(β) 一つの不可見の想定によって、矛盾が解消されるならば、複数の不可見は想定すべきではない。³⁸⁾

想定の対象としての不可見なものの aneka に対する eka, alpa に対する 0 の両者を含意するものとしての alpa (or alpiyasi) を用いて明確に表現された、Śabara による xvii) の原則 F, 即ち「少数の、不可見のものの想定が正しい」(alpiyasy adrṣṭakalpanā nyāyyā) こそ、時経て、Vācaspati によって与えられた原則 C, 即ち「想定 of 簡潔さのある所説を余は好めり」(kalpanālāghavaṃ yatra taṃ pakṣaṃ rocayāmahe) の一祖形と見なし得るのである。Śabara に

よって用いられている bahu の対概念を表わすものとしての alpa³⁹⁾は、後代においても kalpanālāghava 中の lāghava を説明する際に一度ならず用いられたものであった⁴⁰⁾。Kumārila によってはなされなかったとはいえ、プラバーカラ (Prabhākara) によっては、Śabara によるその原則を踏まえて evaṃ cādṛṣṭānumānaprasāṅgakalpanā laghiyasī bhaviṣyati⁴¹⁾ とまで表現されていることも、今の推定を支持するものと言えるかも知れない。

ミーマーンサー学派の主要な関心事であるヴェーダ聖典の解釈に当たっての特殊な原則 F と、さらに広範囲に適用し得る謂わば一般化された原則 C の間にあって、Kumārila によって (α) (β) の二局面がこの上なく見事に析出されたことは、極めて意義深いのである。Kumārila が、その膨大な著作中で、全く屢々その原則に依って議論を展開していることは事実である。だが、それは常に個々の聖典解釈上の問題を越えてではなく、しかも、bahv-(adrṣṭa)-kalpanā, aneka-(adrṣṭa)-kalpanā, eka-(adrṣṭa)-kalpanā, alpa-(adrṣṭa)-kalpanā, stoka-(adrṣṭa)-kalpanā 等を用いてのもの⁴²⁾である。そして Kumārila は、lāghava (or laghutva; laghu), gurava (or gurutva; guru) を kalpanā との結び付きで用いることは、ほとんどと言って良いほどになかった。それには、Śabara の衣鉢を継ぐミーマーンサー学派の正統としての Kumārila にとって、Śabara が lāghava, gurava を全く別のコンテキストで別の意味合いで用いている⁴³⁾という事情があったことが関係していたかも知れない。

Kumārila や Prabhākara には、kalpanālāghava,-gurava という術語の使用例は見られないにしても、二人とほぼ同時代人と考えられている Śaṅkara やマンダナ (Maṇḍana) には、kalpanālāghava,-gurava という術語に直ちに収斂するかの如き用例が以下のように確かに見出されるのである。

xix) vṛddhavyavahāre ceme varṇaḥ kramādyanugṛhītā gṛhītārthaviśeṣasambandhāḥ santaḥ svavyavahāre 'py ekaikavarṇagrahaṇānantaram samastapratyavamarśinyām buddhau tādrṣā eva pratyavabhāsamānās taṃ tam artham avyabhicāreṇa pratyāyayiṣyantīti varṇavādinō laghiyasī kalpanā, sphoṭavādinās tu drṣṭahānir adrṣṭa-kalpanā ca, varṇās ceme krameṇa gṛhyamāṇaḥ sphoṭaṃ vyañjayanti sa sphoṭo 'rthaṃ vyanaktīti garīyasī kalpanā syāt / (BSSBh, p. 330, ll. 2-6)

19) また、古老の言語活動において、これら諸の字音は、順序等によって支持されて、特定の意味との関係が把捉されたものとしてある。自らの言語活動においても、〔それら諸字音は、〕一々の字音の把捉の直後に、一切を想起する意識に、それほどのものとしてのみ、現れて、各々の意味を、逸脱なく了知せしむる。以上が、字音論者にとってのより簡潔な想定である。一方、スポータ論者にとっては、可見のものの排棄と、不可見のものの想定がある。そしてこれら諸の字音は順番に把捉されてスポータを顕現する。〔さらに〕そのスポータが意味を顕現する、というように、より複雑な想定があるであろう。

xx) tathā saty evaṃ gauravāt kalpanāyāḥ, ekasyaivāstu mähātmyaṃ yad eko 'pi nāneva bhāsate, laghutvāt kalpanāyāḥ; (BSi, p. 73, ll. 12-13)

20) そうであるならば、このように想定が複雑であるが故に、他ならぬ唯一のものに、唯一であっても種々であるかのように、現れるような、力(māhātmya)があるべきである。想定が簡潔であるが故に。

この他にも、Śaṅkara には、kalpanālāghava の用例⁴⁴⁾が、Maṇḍana には、kalpanāgaurava の用例⁴⁵⁾が見出される。また、Prabhākara の弟子と見なされるシャーリカナータ (Śālikanātha) には、既に Vācaspati に匹敵する程に多数の kalpanālāghava,-gaurava の用例がある。xix)xx)に見た Śaṅkara や Maṇḍana の用例はある意味では過渡的なものとも考えられるから、kalpanālāghava,-gaurava がはっきりと術語化された時期もほぼ Kumārila 以降と推定出来るであろう。また、Vācaspati 以降、単に lāghavāt, gauravāt という形で、議論に用いられるならば、それは、原則Cに端的に見られるような「理論構築上の簡潔性の原則」に依拠しての、kalpanālāghavāt,-gauravāt のことと考えるとほぼ誤らないであろう。

Śabara や Kumārila によって、個々の具体的命令文 (vidhi) を念頭においての、新得力 (apūrva) としての不可見 (adr̥ṣṭa) との関わりで適用された聖典解釈上の原則が、後代一般化されて、幅広く活用されたことは、改めて繰り返すまでもあるまい。kalpanālāghava,-gaurava という術語によって表わされる二概念と、それらと表裏をなす一つの原則を詮議し、一つの歴史的展望を模索するという小論の所期の目的は以上でほぼ達成されたと考えるが、如何であろうか。(1987. 7. 15)

《略号》

BM: Bhāmatī → BSSBh

Brh: Bṛhatī (5pts, Madras, 1934–67)

BSi: Brahmasiddhi (2nd Ed., Delhi, 1984)

BSSBh: Brahmasūtra-Śāṅkarabhāṣya (Bombay, 1938)

JNMV: Jaiminiyanyāyamālāvistara (Reprint, Osnabrück, 1970)

MD: Mīmāṃsādarśana (7pts, AnSS 97, 1970–75)

MDhS: Mānava Dharma-śāstra (London, 1887)

MK: Mīmāṃsākoṣa (7pts, 1952–66)

MMU: Mānameyodaya (2nd Ed., ALS 105, 1975)

NBhus: Nyāyabhūṣaṇa (Varanasi, 1968)

ND: Nyāyadarśana (Cal. Ed., 1936–44)

NK: Nyāyakaṇikā → VV

NKan: Nyāyakandalī (Varanasi, 1977)

NM: Nyāyamañjarī (3pts, Varanasi, 1982–84)

NVTT: Nyāyavārttikatātaparyāṭikā → ND

NS: Nyāyasūtra → ND

PPañ: Prakaraṇapañcikā (Varanasi, 1961)

SBh: Śābarabhāṣya → MD

SDS: Sarvadarśanasamgraha (3rd Ed., Poona, 1978)

SV: Ślokaṅkā (Varanasi, 1978)

TB: Tattvabindu (AnnUSS 3, 1936)

TBhP: Tarkabhāṣāprakāśikā (BSPS 84, 1937)

TnV: Tantravārttika → MD

TupT: Ṭupṭikā → MD

Vipañ: Vipañcitārthavyākhyā ad Vādanyāyaprakaraṇa (Varanasi, 1972)

VV: Vidhiviveka (Varanasi, 1978)

Vyākhyā: Vyākhyā of Vaidyanātha Śāstri ad SBh → MD

註

- 1) kalpanālāghava, kalpanāgaurava という術語をどのように解釈するか、という点は問題である。xx) の用例に端的に伺われるように、kalpanā(gen.)+lāghava-(or gaurava-) と解するのが普通である。これは、また、頻出する laghu-(or laghiyas; guru-or gariyas-) (nom.) + kalpanā(nom.) の用例にも合致するものである。この他に、-kalpanāyām+lāghava-(or gaurava-) の形が見られるが、nānāsarvajñakalpanāyām yatnagauravaprasaṅgāt / (NM, i, p. 385, ll. 12-13) との関わりで主に考慮すべきものであり、本稿では検討されない kalpanālāghava,-gaurava に関するもう一つの歴史的展望を与えるものかも知れない。また、laghu, guru に対して「軽い」「重い」を第一義的に考えて、「想定 of 軽いこと」「想定 of 重いこと」と訳語を与えても支障はないと思われる。ただし、後者に対して、例えば「想定 of 煩瑣であること」とするならば、「煩瑣」という言葉自体、概して否定的に用いられるものであることを考慮するならば、控えるのが妥当であろう。註 30) 参照。
- 2) SDS, Akṣapāda 章においては、sa(=tarka) caikadaśāvidhaḥ / vyāghātātmāśrayetaretarāśrayacakrakāśrayānavasthāpratibandhikalpanākalpanālāghavakalpānagauravotsargāpavādavaijātyabhedāt / (SDS, p. 238, 1. 8-p. 239, 1. 2) と、11種のタルカの内に列挙されている。なお、この kalpanālāghava, -gaurava を含む、種々タルカについては、S. Bagchi, *Inductive Reasoning: A Study of Tarka and Its Role in Indian Logic*, Calcutta, 1953 が詳しい他、K. H. Potter, *Presuppositions of India's Philosophies*, Englewood Cliffs, N. J., 1963 を初め、D. H. H. Ingalls, B. K. Matilal 等の Navya-Nyāya に関する書物の内に論じられている。なお、tarka を分類列挙するリストの内に、この二術語が登録されるのは、Śriharṣa の Khaṇḍanakhaṇḍakhādyā を以って嚆矢とする、という点が指摘されている。
- 3) 筆者が敢えてこう言うのも、時に kalpanālāghava,-gaurava がそれ自体、一つの原則のように扱われることがあることを見聞するからである。後でも明記するように、その二概念と、その背景にあるインド人によって好まれた一つの原則を明確に区別する必要がある。註 7) 参照。
- 4) S. Bagchi, op. cit. においては、歴史的展望に関しても若干の配慮がなされているようであるが、tarka 全般を主題としているという書物の性格上、kalpanālāghava,-gaurava については、充分とは言えない。
- 5) この原則 D の表現は、Śalikanātha が伝える “dharmikalpanāto varam dharmakalpanā laghiyasī” (PPañ, p. 400, ll. 17-18) に基づいている。Cf. MK, p. 2234.
- 6) 残余法については、NS III-2-39 及び、それに対する諸注釈を参照のこと。
- 7) この表現は、宮元啓一「因中無果論に於ける原因の力能 (Śakti)」『仏教学』5号(1978), pp. 69-88 の「…Bhātṭa 派は、(a)理論構築上の簡潔性の原則 (lāghava) により、

力能は性質という既知の *padārtha* の中に含まれる, …」(同論文, p. 73; 下線は筆者)との記述に拠る。ただし, 下線部は, 「…理論構築上の簡潔性 (*lāghava*) の原則…」とすべきではなかったか。

- 8) *dharmin* と *dharma* の想定 of いずれが「簡潔」であるか, という問題については議論が予想されるが, 本稿での検討は断念せざるを得ない。
- 9) 言うまでもなく, *kalpanālāghavāt-gauravāt* という語が議論に持ち込まれることは, とりもなおさずその原則が持ち込まれることを意味する。
- 10) 宮元前掲論文は, この用例を初めとして, *Mīmāṃsā* 学派の「力能 (*śakit*)」の検討に際しては, 綱要書である *MMU* に依拠している。
- 11) *alpa* が如何なる意味で用いられているかは, 必ずしも明確ではない。なお, *alpa* の代表的な用例として知られる *MDhS* II-149 では *bahu* との対比で用いられている。Cf. *MDhS*, p. 27, 1. 3.
- 12) *NVTT*, p. 348, 1. 20. また, *Vācaspati* には *nanu ca prāmāṇikaṃ kalpanāgauravam api na doṣam āvahati* / (*NK*, p. 229.1.13) という用例もあるが, これは明らかに *Kumārila* の, *pramāṇavaśāc cānekādṛṣṭakalpanā 'pi nirdoṣā* / (*TnV*, iii, p. 86, 1. 14) を踏まえたものであり, *tarka* が *pramāṇa* の支持を得て初めて有効なものとなることを示すものとして重要であろう。なお, xv) の用例を参照されたい。
- 13) *Mīmāṃsā* 学派の伝統では, *Kumārila* を *ācārya*, *Prabhākara* を *guru* と呼ぶことがある。*MMU* でも, 基本的にはそれを踏襲している。
- 14) 英訳者は, この場合に限らず, 出典に関しては, 基本的には註記を付していない。
- 15) 例えば, *tad uktam ācāryaiḥ* として, *SV*, *Apoha-1* (*MMU*, p. 237, ll. 6-7); *Codanā-195cd-196* (*MMU*, p. 270, ll. 4-6) が, また, *yathāhur ācāryāḥ* として, *TnV*, ii, p. 344, ll. 8-9 (*MMU*, p. 277, ll. 1-2) が, また, *tad uktam ācāryapādaiḥ* として, *SV*, *Codanā-191* (*MMU*, p. 281, ll. 1-2) が引かれている。
- 16) *Nārāyaṇa* は, *MMU* において, *tad uktas bṛhaṭṭikāyām* として, *Kumārila* の現行著作中には見出されない一詩節を引いている (*MMU*, p. 128, ll. 3-4)。
- 17) 本稿で中心的に論じられる *Vācaspati* の著作, 年代等については, 拙稿「ヴァーチャスパティの年代論」『東洋学報』68-3・4(1987), pp. 356-333 を参照。
- 18) *Vācaspati* が単なる *ācārya* という呼称で呼ばれたという事例が報告されたことは筆者の記憶にない。Cf. *Nyāyarakṣamaṇi* (*SADGS* 1, 1971), p. 67, 1. 2; p. 205, 1. 10; etc.
- 19) 筆者が用いる *TB* の刊本の他, *M. Biardeau, ed. & tr., Le Tattvabindu de Vācaspatimīśra*, Pondichery, 1956; 金倉圓照「ヴァーチャスパティ・ミシラのタットヴァビンドゥ」『インド哲学仏教学研究〔Ⅲ〕』(東京 昭51), pp. 319-359; *A. S. Shastri, ed., Tattva Bindu by Vachaspati Mishra*, Varanashi, 1975 を参照。
- 20) 理論を構築する際に想定する *śakti* の数の多・少を, *kalpanāgaurava*, *-lāghava* と

捉え、理論の優・劣の判定の基準にすることは、理解し易いであろう。

- 21) TB は、全篇、この kalpanālāghava に関わる原則に従って、議論が進められているとまで極論し得るものであるが、その議論の内容は、金倉前掲論文の他、拙稿「Tattvabindu について」『印仏研』29-2 (1981), pp.168-169 を参照されたい。なお、筆者は別に TB の内容に即した、「ミーマーンサー学派の文章論」という論稿を用意している。本稿は、いわばその論稿の「補遺」として企図されたものである。
- 22) 原則Cを受け入れたとしても、何れの説に kalpanālāghava があるかとの認定は、微妙かつ精密な議論を前提とする筈である。この原則を多用する Vācaspati が、その点を明確に自覚していることを端的に示すものとして、その後半部は意義深い。
- 23) 本稿では触れられないが、この前半部は、原則E以上に一般的な一つの原則をなすものである。
- 24) kalpanālāghava に関わる諸原則の検討においては、dr̥ṣṭa と対比的に扱われるこの adr̥ṣṭa についての考察が不可欠である。ここにおいて、adr̥ṣṭa を「経験されていないもの」と便宜的に訳出したのも、vii) の前半部にある miyamāna- を考慮したからであるが、pratyakṣa 以外の pramāṇa によるものは除外されるべきであろう。というのも、後に触れられるように、Mīmāṃsā 学派により pramāṇa と考えられる arthāpatti によって了知される śakti が、adr̥ṣṭa として扱われているからである。註 29) 参照。また、狭義には、視覚による知覚を意味するものであることから不可見と訳出されるが、多くは聴覚等により直接知覚できない対象をも含意するものと考えられ、本文中、可見、不可見と言われるのは、その広義の意味で用いられている。xviii) の用例及び註 27) を参照されたい。なお、Mīmāṃsā 学派の聖典解釈の局面においては、特定の祭式行為の果として考えられる新得力(apūrva)を含意して adr̥ṣṭa を用いることが、普通である。dr̥ṣṭa, adr̥ṣṭa 一般に関しては宮元前掲論文、特に Mīmāṃsā 学派におけるそれに関しては針貝邦生「Mantra と Niyama」『哲学年報』32(1973), pp.101-123 を参照されたい。
- 25) 真・偽を廻って展開される筈の(?) 哲学上の議論に個人の「好き」「嫌い」が介入してくることは、他説の否定を表明する際に屢々 apeśalam (xi) を参照), asundaram 等の語が用いられることと共に、注目に値する事実である。
- 26) 『哲学事典』(平凡社), p.192, 「オッカムの剃刀」の項参照。これまで、kalpanālāghava に本格的に言及する研究において、このオッカムの剃刀を引き合いに出さないものは先ずないと言える程である。Cf. Bagchi, op. cit., p.176; Potter, op. cit., p.83; etc.
- 27) この対比を明確に表現したものとして、Śaṅkara による xix) 中に見られる dr̥ṣṭa-hānir adr̥ṣṭakalpanā ca も注意を要する。それとの関わりで Kumārila の śrutahānyaśrutaparikalpanā (TnV, ii, p.360, 1.13), śrutahānyaśrutakalpanayoś ca

tulyo doṣaḥ (TnV, iv, p. 250, l. 21–p. 251, l. 9), Bhāsarvajña の śrutahānyaśrutakalpanādoṣa (NBhūs, p. 462, l. 2) 等も考慮されるべきであろう。註 24) 参照。

28) 宮元前掲論文参照。

29) 例えば, Kumārila の śabdāśāstrāyā adr̥ṣṭayā śaktyā 'rtham abhidhatte (TupT, vi, p. 343, ll. 21–22) からは, Kumārila によっても śakti が adr̥ṣṭa と考えられていたことは明白である。これとの関わりでは, Kumārila の例えば, sāmārthyam sarva-bhāvānām arthāpattiyā 'vagamyate / ekasāmārthyasiddhe 'rthe nānekaṃ tac ca labhyate // (TnV, ii, p. 213, ll. 22–23) 等に明らかのように, śakti が arthāpatti によって知られるという Mimāṃsā 学派の定説と, kalpanālāghava の背景にある諸原則が Mimāṃsā 学派の中で特に展開を見た事実との関わりも興味深くあるが, ここでの検討を断念する。

30) Cf. Bagchi, op cit., p. 175; Potter, op. cit., p. 83; etc. この「質的」(qualitative) な kalpanāgurava に関して, Bagchi は, 「理解し難いこと」(hard to comprehend) との説明を与えている (Bagchi, loc. cit.) が, それは, 註 1) で触れた-kalpanāyām yatnāgurava - (想定に際しての, 労役が重いこと) との関わりでも検討すべきである。つまり, Śāntarakṣita の tatra na tāvad ayam ādyaḥ prakāraḥ saḥate vicārabhāragauravam (Vipañ, p. 28, l. 16) から推定出来るように, -kalpanāyatnālāghava, -gurava を意味しての kalpanālāghava, -gurava の問題である。また, それらとは別に kalpanālāghava, -gurava に対して, 時に「考え易い」「分別の困難」なる訳語が与えられることがあるが, それらは, 本稿において見られる諸原則の意義を日常経験的レベルに安易に解消してしまうという危険を孕んでいるという点で, 問題を後に残すものと言えよう。kalpanālāghava, -gurava は, pratipatti-lāghava, -gurava とは峻別されるべきものである。laghu, guru のニュアンスを検討する際に考慮すべきものとしては, インドの哲学文献等の中で屢々用いられる, granthagaurava (=vistara) bhaya- 中の gurava の用法や, Patañjali の Mahābhāṣya (ad PāṇiniS I-1-1) 中で文法学 (śabdānuśāsanā) の prayojana の一つに挙げられている laghu との関連も顧慮される (?) laghūpāya 中の laghu の用法がある。Cf. Caraka-saṃhitā (2nd Ed., KSS 228, 1984), pp. 173ff.

31) Śrīdhara のこの一節を含む部分は, 宮元前掲論文, pp. 76–83 で和訳されている。

32) 北川秀則「Arthasaṃgraha 和訳解説 I」『名古屋大学文学部研究論集(哲学)』XLVIII (1968), pp. 37–62。

33) 同論文, p. 39, ll. 6–7。

34) 同論文, p. 39, ll. 10–12。なお, 針貝前掲論文, p. 107 にはこの北川博士による「原則 B」が「原則 A」と共にそのまま引かれており, dr̥ṣṭa / adr̥ṣṭa の考察の基礎に据えられている。

- 35) TnV に対する Someśvara の注釈 Nyāyasudhā 中には, *dr̥ṣṭe sambhavati adṛṣṭakalpanam ayuktam iti nyāyasya...* (MK, p. 2117 に拠る) とある。
- 36) この原則 F には, Śabara 自身のものに限っても, 若干のヴァリエーションが存する。*adr̥ṣṭārthānām upakāraikalpanā 'lpiyasī nyāyyeti* (SBh, iii, p. 2, ll. 1-2) の他, *alpiyasy adṛṣṭānumānaprasaṅgakalpanā bhaviṣyati* (SBh, ii, p. 337, 1. 2), *alpiyasy adṛṣṭānumānaprasaṅgakalpanā bhavati* (SBh, iii, p. 82, 1. 5) がある。また, 針貝博士は, 「Mīmāṃsā 学派は *adr̥ṣṭa* (or *apūrva*) の想定は可能な限り最小限にとどめるべきであるという主張に立つ。」(針貝前掲論文, p. 113, ll. 12-13) と記しておられる。
- 37) 「ほぼ」と言うのは, Kumārila に, *śaktigauravatulyatve* (TnV, iv, p. 47, 1. 4) の異読として, *śkatikalpanā-* があり, Prabhākara に, 後で見ると, *kalpanālāghava* に収斂するかの如き, *...adr̥ṣṭānumānaprasaṅgakalpanā laghiyasi...* (Brh, iii, p. 283, 1. 6) があるからである。
- 38) 註 29) 中に引いた, Kumārila の TnV 中の詩節後半は, この (α) のヴァリエーションと見なし得る。
- 39) TnV, iv, p. 268, 1. 15-p. 269, 1. 4 には, *bādhya-bādhaka* 関係にあるものの種々事例が列挙されているが, その中に *adr̥ṣṭa-dr̥ṣṭa*, *aneka-eka*, *bahu-alpa*, *alpam-bhūyas* とある。
- 40) ii) v) を参照。
- 41) Brh, iii, p. 283, 1. 6.
- 42) 一々の用例箇所は略すが, *anekādr̥ṣṭakalpanādoṣa* (TnV, iii, p. 4, 1. 22), *bahūni cādr̥ṣṭāni tvayā kalpyāni* (TnV, iii, p. 59, 1. 20), *anekādr̥ṣṭakalpanābhaya* (TnV, iii, p. 85, 1. 24) 等は, *kalpanāgurava* との関わりの上で, 興味深い。なお, 註 12) に引いた TnV の用例も参照されたい。
- 43) Śabara による *lāghava* (or *laghu*, etc.), *gurava* (or *guru*, etc.) の用例は少なからず見られる。*evaṃ vedavākyaṇy evaibhir vyākhyāyante, itarathā vedavākyaṇi vyākhyeyāni svapadārthās ca vyākhyeyā iti prayatnagauravaṃ prasaṅgyeta* / (SBh, i, p. 2, ll. 2-4), *tathā hi laghiyasi pratipattiḥ pṛṣṭākoṭenopadeśe gariyasi* / (SBh, v, p. 2, 1. 5), *tathā 'py aprakṛtena vyavahitena ca kalpyamānā prakṛtakalpanāyā gurutarā syāt* / (SBh, v, p. 327, ll. 19-20) が代表的なものであり, 孰れも興味深い。二番目のものは, *laghiyasi* と *gariyasi* が対比的に用いられていることで, また, 最後のものは, *-kalpanāgurava* に収斂する形を示していることで注目すべきであろう。にも拘らず, Kumārila によっては, *kalpanālāghava*, *-gurava* に類似の用例が, 明確には見られないことは, Śabara が上記の用例の他に, *śrutiś ca lakṣaṇāyā gariyasiti* / (SBh, v, p. 35, 1. 13) と用いていることが関係しているかもしれない。Kumārila がそれを *śrutiś ca lakṣaṇāyā jyāyasi* / (TupT, v, p. 419, 1.

20) とパラフレーズし、G. Jha が、“Direct Assertion is more authoritative than indirect Indication.” (G. Jha, tr., *Shabara-bhāṣya*, ii, Baroda, 1934, p. 755, 1. 14) と英訳を与えていることから明らかなように、Śabara は *gariyasī* を、*arjyasī* と *gariyasī* の二つを、*arjyasī* と *gariyasī* の二つに対して肯定的な意味を担う語として用いているのである。さらにこれとの関わりでは、Kumārila が *anekakalpanāyās ca jyāyasī hy ekakalpanā* / (SV, Śūnyavāda-18ab, p. 194, 1. 26) と用いていることが、興味深いであろう。

44) BSSBh, p. 325, 1. 11.

45) VV, p. 229, 1. 3.